

<b>Title</b>	被服造形学序説
<b>Author</b>	中嶋, 朝子
<b>Citation</b>	大阪市立大学家政学部紀要. 8 卷, p.43-52.
<b>Issue Date</b>	1961-02
<b>ISSN</b>	0473-4742
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学家政学部
<b>Description</b>	

Placed on: 大阪市立大学学術機関リポジトリ

Placed on: Osaka City University Repository

# 被服造形学序説

中 嶋 朝 子

## INTRODUCTION TO THE SCIENTIFIC AND AETHETIC STUDY OF CLOTHING.

By ASAKO NAKASHIMA

### 被服の成立とその意味

被服は人間の着るものである。人間によって着用されない被服は直接被服としての意味を担っていないし、また被服としての存在意義をもっていない、博物館に並べてある十二単衣は平安朝時代の大宮人(女子)が着ていた被服であるという歴史的事実を物語ってはいるが、現代の人間が着る被服としては何の価値も有していない。又店頭飾ってある被服は商品に過ぎない。たんすの中に蔵ってある被服は誰かの所蔵品に過ぎない。これらが被服としての価値を発揮するためには人間によって着用されねばならない。存在するものとしての被服と、人間によって着用されている被服とでは、被服のもつ意味、被服の構造・内容・形態とも同じではない。その場所において、次元において異っている。(存在する被服はAによっても着られるであろうし、Bによっても着られる可能性を有している。存在する被服はその構造において身頃があり、衿ぐりがあり、袖もついてはいても、異なる形と大きさの布の接合されたものであったり、単に一枚の或る大きさを持った布に過ぎない場合すらある。着用されている被服の構造は、袖は上肢を包み、身頃は軀幹部を被い、衿ぐりからは頭部が露出している。一枚の平たい布もドレープを形成しつつ身体を美事に被っている。従って形態においても前者は平面的で、後者は立体化してくることは一見明かなことである。)

では人間は何故被服を着るのであろうか。未開人といえども何らかのものを身にまとっている。また、聖書の創生記第3章に、エデンの楽園におけるアダムとイブは蛇の誘惑に従って禁断の木の実を食べて以来、眼が開いて自分達が裸体であることを知った。と同時にいちぢくの葉を見て、裸体をかくすためにそれを aprons にした、とある。彼等は good and evil (智慧)の眼が開いて羞恥心が芽生え、自分達の裸体をかくすために、眼が開くと同時に見たところのいちぢくの葉で身体をおおったのである。この聖書の伝説に基いて、人類最初の被服はいちぢくの葉であるといわれている。この伝説に従えば、着衣の動機は智慧の眼の開かれた人間の羞恥の衝動によるものと解される。

着衣の動機として Flügel はその著 "The Psychology of Clothes"の中に、Decoration・Modesty and Protection の三つりをあげている。いちぢくの葉の伝説はこのうちの Modesty によるものであることを物語っている。アダムとイブの智慧の眼は、いちぢくの葉を身につけた方

が裸体より美しいと思っただのではないだろうか。人類学では未開人は被服を着ていなくとも何らかの装飾は身につけているという証拠をあげているし、また幼児の精神的発達には裸体に対する羞恥心より身体を装飾する喜びの方が早いとも言っている<sup>2)</sup>と。しかし幼児は生れながらに大人の環境の影響を受けているから、その考察は困難なことであろう。

ただ人間の心理的動きの中には self-display (自己誇示) の衝動の存在を否定することは出来ないとは言える。self-display の一つの demonstration として身体を装飾するという形態を採り得ることも考えられることである。そして self-display の衝動は人間の社会的存在において誘発されるものであるから、Decoration は Modesty より、その発生において社会性を多分に担っていると言える。何れにしても人間の羞恥の衝動から被服で裸体をおおうことによって、その場合、如何に被うかによって身体を装飾し、あるいは身体美をも強調することになるのである。

Protection の動機に関しては、現在において当然認められているところであり、自己保存・種族保存の本能から身体を保護しようとする、いわば動物的本能としての欲求に基づくものである。Protection は人間の住む環境の相違によって担うべき加重が異ってくる性質を有している。

とに角、人間は本能的に羞恥心をいだき、社会的存在において self-display の欲動が誘発され、自己保存・種族保存の本能から身体を保護しようとするもので、被服は人間のかかる本来的欲求に対し、ある程度の満足にあたえているものである。被服は人間の着用によって必然的に成立せざるを得ないものとなった。逆に言えば、人間はかかる自からの衝動や欲求を満たすためにも被服を身にまわってきたのである。では人間は如何なる被服を如何にして調製してきたであろうか。これについては後述の課題のところでも取上げることにする。

被服は人間の着るものであるという前提に基いて、着衣の動機が人間性の本来的な衝動や欲求によって成立したことを考察したが、被服は人間の智慧の眼の開かれた瞬間から人間と共に存在し、人間の生活環境や生活内容の変化に伴って被服の材料や形態は変化する可能性を有し着用者の生活態度・個性・美意識などによって被服の担ってくる意味内容が異なったものとなる可能性を蔵している。かかる性質を担っている被服は、着用者Aによって現在この場所で着る被服として、無限の可能性の中から正にその被服が選択され着用されているのである。とすればその被服はその時その人固有のものと見做すことが出来るわけである。

カーライルの Sartor Resartus のはしがきに、「学者達は衣服をば偶有性でない固有性として、木の葉や鳥の羽のように自然的自発的なものと見做すのである」<sup>3)</sup>と述べているが、これは被服が人間固有のものであることを明言していることになる。

またエリック・ギルは次のように言っている。「人間が裸体であるということは不自然なのだ。この大自然の中にはだかの動物などというものは無いし、また人間は衣服を着ることによって他の滅亡してゆく動物たちと袂を分っているのでもない。自然らしさは衣裳を脱ぎ捨てることによってではなく、衣裳を着ることによって成就されるのである。そして人間と他の動物との差異も人間が衣服を着ている点にあるのではなくて、人間は着ている衣服を脱ぐことが出来るという点にあるの

です」<sup>4)</sup>と。この言葉も、人間本来の姿は衣裳を着ることによって成就されるものであるというのであるから、同じ意味を有するものと解される。被服が人間固有の意味を担って存在するものであるという見解は以上簡単な考察ではあるが、一応妥当のようである。

## 被服造形学の課題

### 1. 被服造形は被服の成立根拠に規定せられる

被服造形の問題を考える場合、先ず我々はそれが被服の成立根拠によって規定せられていることを無視することは出来ない。被服の成立のためには、まず被服材料がなければならぬ。次にその材料を如何に調製し、如何に着るかによって被服は成立するわけであるが、被服の調製に当面して人間は如何なる被服をつくらんと意図してきたであろうか。

それを規定するものに、まず自然的生理的条件が考えられる。人間はその生活において自己保存・種族保存の本能から自然的環境に対応して身体を保護することを考える。その手段の一つとしても被服が用いられてきた。従って被服は人間の身体を多かれ少なかれ保護する性能を有することが必要である。自然的環境は天然の気候条件と人為的気候条件により変化する。気候条件として気温・気湿・気流・輻射熱・降雨降雪量などがある。これらの条件は地理的に差違があり変動がある。その中において人体はある程度の抵抗力を有し、ある程度の適応性を有しているが、それにも限界があることで、限界を超える時は被服や住居が必要となってくる。その限界については生理衛生学的見地から研究されているところであるが、被服造形学においては、この研究結果に基づいて健康且快適なる被服をデザインし、製作することになる。そのためには前述の各気候条件に対応して人体を健康且つ快適ならしめることの被服の性能について追求することにもなる。

よってこれら気候条件と被服との関係についてみるに、人体は恒に 37°C 余の体内温を維持し、生理的機能を順調に行っている。そのエネルギー源として食物を摂取し、空気を呼吸しているのである。体内で生産される熱エネルギーと、同じ速度で身体から熱が放散される時、身体は熱平衡を保ち大体快適である。人体が裸体でもほぼ快適に過ごすことの出来る限界は 26°C 内外で、それ以下になると差当って被服が必要となる。また気温の高い時には体内の産熱量に対して放熱量の割合が少ないので人体は熱過剰となり、体温は上昇せざるを得なくなる。この場合、体温調節の一作用として人体は発汗現象を起すが、この汗の蒸発により人体は冷却せられ熱平衡の維持が可能となる。汗の蒸発は大気中の湿度の影響を受け、関係湿度大なる時は蒸発汗量が少なく流汗量が多くなり、関係湿度小なる時には蒸発汗量が多くなり冷却効果は大となる。発汗時の被服には汗の蒸発量を大ならしめる性能が必要である。汗の蒸発量に影響を及ぼす要素として、気温・被服のゆとり・被服材料の通気率などがあり、これら要素のうち気流は汗の蒸発量に影響すること大で、発汗時には有効に作用する。しかし寒冷時の気流は人体からの奪熱を加速度的に増大する。かかる場合には防風の被服が必要となり、防風の被服はその材料と形態の面から考慮することが有効である。また太陽からの輻射線は熱作用をあたえる赤外線、色彩を生ぜしめる可視光線、化学作用をあたえる紫

外線など人間生活に重要な影響を及ぼしている。夏の直射日光に対してはこれを防ぐ効率の大なる被服類がよいわけで、冬には日光の利用が必要となる。降雨降雪に対しては雨や雪の落下エネルギーのうちかつだけの被服地の厚さと、せんい密度の均一性が必要となる。

自然の気候はこれら各気候条件の多様な複合によって成立し、変動し、差異がある。更に人為的気候条件は自然的環境を複雑化している。従って被服もそれに対応して適切な複合的性能が必要となるわけであるが、この場合重要なことは、これら被服の性能は人間によって着用された状態において把握されねばならないということである。以上のように、被服は自然的環境に対応して人間の生活を健康かつ快適にする性能を具備していなければならない、その性能を高度化するための研究など被服造形学の問題ともなる。

しかしこれと同時に、人体は被服を着ることによって不要な圧迫や荷重を受けるわけで、人間生活に伴う姿勢や活動や発育などを阻害しないことも被服に要求される性能である。従って被服による圧迫や荷重と人体生理現象や発育や人体機能との関係なども問題となり、衛生学的見地からの研究も多い。人類の生活圏が拡大するにつれ、この種の自然環境への適合性を備えた被服の問題は増加してゆくわけである。

このほか、人間の生活に関連するものに社会的環境がある。人間は社会生活において如何なる被服をつくらんと意図してきたであろうか。各人の属する民族性・国民性はその社会に属する人間の被服を規定している。また職業・社会的地位・社会に対する態度・個人の趣味嗜好など社会生活に伴って派生してくる要素は被服を規定するところの社会的心理的条件といえる。即ち人間はその属する民族・国家の一員として生活する場合、その民族としての、その国民としての被服を着用する。人間はまたその職業により制服を着る場合もある。儀式にはその慣習に従った被服を着用する。社交においては長上に対する敬意を表したり、自己の品位を示す目的を担った被服を着る。仕事をする時は作業服を、休養する時は寛ろいだ被服を着る。かく考えてくると、被服は人間生活と共に種々の役目を担って着用されている。その他階級制度の社会では着用者の階級を表示したり、また特定社会集団の標識としての意義を担ってゐる。以上の如く被服は社会的に規定せられ、制約も受けている。

しかし一方、人間は社会生活において **self-display** の衝動や羞恥の衝動を本来的にもっていることも否定出来ない。社会生活を意識する年齢になれば羞恥の感情が芽生えてきて、自ら裸体をかくそうとする。それと同時に被服に対する自己の欲求をあらわしてくる。被服に対する好き嫌いを表現するようになる。好き嫌いは子供においては案外肌触りなどが原因となる場合が多い。心理学的に **Skin auto erotism** につながるものようである。勿論色合いとか模様や形態などの視覚も関係するところである。そして被服に対する嗜好や趣味への発展となるのであるが、個人の嗜好や趣味は幼ない時代からの生活環境に影響されるところ大で、被服にあらわれた趣味の相違、のみならず被服自体に対する観念のあり方はかなり巾の広い個人差を生じる。心理学的見地から種々の型<sup>3)</sup>に分類している学者もある。つまり被服は人間本来の心理的条件により規定せられてくるわけで、従って被服はこれら社会的心理的条件を満足せしめる性能を有することが必要とな

る。以上の如く、我々がつくらんとする被服、着んとする被服は社会的心理的諸条件に規定され、制約も受けている。

次に被服の調製それ自体を規定するものは技術的条件である。被服材料の調整のためには人類はその昔、植物の葉や樹皮を用いたり動物の毛皮を着たりしたようである。新石器時代になると、麻糸や麻布を使用したらしく、つまりこの時代になると自然物からせんいをつくり出したのである。せんいを発見し、それを紡いで糸にする工夫、それを織って布をつくる技術を発明した。二十世紀はじめには人造せんいをつくり出し、更に1938年には石炭と水と酸素とからせんいを合成するに至ったのである。せんいから糸に紡ぐ技術、糸から布に織ったり編んだりする技術、布から被服を作る技術も手工業から機械的方法へと進歩して今日では人口増加や消費量の増大に伴って機械化による大量生産も行われている。被服はかかる技術的条件の変化に伴って変化し規定されてくるわけである。

以上を総括して、被服の成立根拠は自然的生理的条件・社会的心理的条件・技術的条件によって規定せられることとなり、被服はこれら諸条件を満足せしめる性能を有することが必要となる。

## 2. 被服造形は歴史的・社会的事情により制約せられる

さらに被服造形の問題を考える場合無視出来ないのは、前に一寸触れたが、被服は社会的・歴史的事情により制約を受けているということである。被服の歴史的・社会的制約は被服の伝統や流行という形であらわれてきている。これらには経済・宗教・政治などの要素が関連していることは勿論である。伝統は被服の形式を固定化し、流行は被服の様式を変化する。何れも歴史性を有し、社会文化の産み出したものであるが故に、その社会に生活する人間はこれらの制約からまぬがれることは出来ない。

伝統的被服は社会文化の遺産として意識され、価値評価されつつ傳承されている。価値意識・歴史意識の高い伝統的被服は、特に宗教的意味を担ったそれは幾世紀にもわたって受けつがれている。しかし伝統的被服も社会の変化に伴って非合理性を担ってきた場合、合理化される運命にありそこに被服の改革が行われる。また階級制度の社会では上の階級と下の階級を区別するため政治的に階級的被服の形式を制定し、それが受けつがれていた。しかし人間には上の階級を羨望し、それを模倣したいと思う欲望がおこるもので、従って何かの機会があれば、その階級的被服の差別を排除しようとする試みがなされる。それは戦争や革命が契機となる場合があったり、為政者の主義政策に伴なわれる場合もあろう。かくして上の階級の被服形式は下の階級の人々によって模倣され採用されることとなる。すると上の階級の人々は下の階級との差別を明かにするため再び新しい被服形式を考案し、ここに流行が生れることとなった。即ち階級制度の社会では、流行は貴族階級から下の階級へと伝わって行った。

しかし今日のデモクラシーの社会では、被服の流行はその動機において、起原において、過程において、そのあり方において、階級制度の社会における流行のそれとは異なっている。今日のデモクラシーの社会における被服の流行は社会文化の変動に伴ない、経済政策にも左右されながら変化している。一つの流行の起原をたずねてみるに、世界的に有名な服飾デザイナーのモード発表に端

を發し、有力な批評家の賞讃の辞によって紹介宣伝せられ、時代思想に合致し、大衆の欲求を満足せしめる時、モードはファッションとしてもはやされるようになる。流行が効を奏するのは流行をつくる人が有能であればある程、批評家や最初の愛用者が有名であればある程、そして時代精神をあらわし大衆の欲求に合致した時大であるが、更に経済政策の裏付けも重要な要素である。資本主義社会では機械主義体制のもとに営利性と商業政策とがつきまとっている。それは大衆の欲求に対して極度に敏感であるばかりでなく、大衆の欲求をも新しくつくり出そうとする。従って被服のみならず現代文化は流行と離れることは出来ない。機械による大量生産と商業主義に基づく広告宣伝は被服に対する観念や態度などを劃一的に結びつけてくる。ここにマス・コミの組織の生成を助長することにもなるわけで、マス・コミの特徴は強力に一方的に方向づけられていることである。マス・コミの力によって方向づけられ製造されてくる被服材料や被服は圧倒的な勢力を占めている。かかる社会において人間の流行に対する心理を観察する時、想起される有名な言葉がある。それは Young, Kimball の言った "Individual and Comformity in Fashion" なる言葉である。彼は次の如く言っている。「流行は人間に comformity・security・social solidarity を求める欲望と、 distinction・individuality・differentiation を求める欲望との間のよき平衡状態をあたえている。流行の全面的変動は individualism と comformity との流動的平衡状態の変動と関連している」<sup>6)</sup> と。即ち人間は自己の属する社会から取残されたくないという気持がはたらくと同時に、一方自己を誇示し、他人から特徴づけたいと望む気持をもっている。被服の流行も、この一見矛盾する気持の平衡を満足せしめつつ変化している。

以上極めて概括的に、被服の伝統や流行が歴史的・社会的所産として、また歴史的・社会的意義を担って流動変遷していることを述べたが、この被服の伝統や流行は被服の形態と密接な関連をもっている。つまり被服の形態を左右し、決定する要因とも言える。被服の流行の本質について形態的分析<sup>7)</sup>を行っているものに Flügel がある。彼独自の方法で明解なる着想である。

### 3. 被服造形の制約性と自由性

被服造形は前述の如く被服の成立根拠に規定せられ、また歴史的・社会的に制約せられることも否めない。しかし被服造形には美的要求の要素も潜在している。人間は自然的規定や社会的制約の中においても、美しく着たいという美意識の萌芽を被服の中にもひそめている。人間は被服を通して自己を表現している。ここに被服の自由性が主要なる場所を占めてくる。自己の表現は無邪気な幼児においては自己の存在を誇示しようとする人間の本能ともいうべき欲求となり、原始的で露骨であるが、成長と共に社会的教養を身につけてくると、その欲求は形を変えてあらわれてくる。被服を媒介として自己を誇示する傾向の強いのは現代文明国においては女子の方が男子より強いようである。これは生活内容の然からしめるところか、性差の然からしめるところか、或いは両方かもしれないが、何れにしても女子においては、被服で身を飾ることの欲求が競争心にもつながり、美望とか嫉妬の感情をも駆り立てる結果となっている場合がある。しかし自己を誇示する欲求が被服を通して sublimate された場合も多い。この段階に達してはじめて被服美を論じる可能性も生れ

てくる。被服の選択・着こなしを通して被服美の形成も可能となる。被服が直接芸術的対象となる場合さえある。舞踊や舞台衣裳などにおいては人間の所作が被服によって生き生きと表現され誇張され、両者一体となって舞踊芸術を演出する。この場合の被服には自然的規定も社会的制約も存在しない。専ら表現効果をねらった芸術的存在となっている。

かかる被服の芸術的存在を可能ならしめる原理の追求も重要な課題であろうが、とにかく被服は自然環境や伝統や流行などの要素により規定せられ制約を受けている面もあると同時に、人間の本能的欲求を満足せしめたり美の表現を試みたりする、いわば自由性を有する面もあり、ひいては美の問題にもつながる可能性のあることを明記すべきであろう。

#### 4. 被服造形と技術

造形は模倣によっても可能であるが、創作のない造形では変化がない。人間は変化を求めて止まない。人間は創造を試みて倦むところを知らない。その第1歩として形を創造してゆく基本問題を考える。形を分析するとその基本となるものは“点”である。点の軌跡は線となり、同一方向への軌跡は直線を形成し、刻々に異なる方向への軌跡は曲線を形成する。一点から二方向への直線は角を形成し、二直線のなす角は鋭角から直角・鈍角と拡がりをもたせる。線の一定方向への軌跡は平面を形成する。平面の形は四角形や円形など幾何学的なものから任意の曲線によって囲まれた種々異なる形の平面を形成することも出来る。かくして一次元の点から二次元の線・面に展開し、面や線の交錯により三次元の立体を構成する。これら展開構成の過程は無数の可能性を有している。しかし被服の形態は人体の形を基礎として考えねばならない。のみならず、それを着て生活し行動する場所との連関、風土的生理的事情との連関を考慮しなければならない。従ってその構成には自ら限界が存在する。

形の創造に対応して、というよりむしろ形の創造の心的過程を基礎づけているものは何であろうか。人間は種々なる色と形とを見ることによって心理的反応を誘発される。暗やみの大空に目をみはる時、雲間から出てきた一点の光をもった星に目は惹きつけられる。夜の空を飛ぶ飛行機の灯火にひきつけられることもある。無限大の空間の中の一個の星、一つの灯火は“点”としての存在である。この“点”に人間は注目し注意を集中する。この時“点”は焦点となり中心的位置を占めることになる。これら注目・注意・集中・焦点・中心などの概念は“点”のもつ心理的属性といえる。“点”はその置かれている面との割合、“点”のその面において占める位置によって異った心理的属性にも発展する。“点”にはたらいだ力の強さ・方向・量により引かれた線の心理的属性は異なり、例えば垂直線は緊張感・水平線は安定感・斜線は速さの感じをあたえる。角もその角度と角を形成する二直線の長さとの相互関係により人間にあたえる刺激は異ってくる。円形や隋円形、四角形や長方形なども夫々異なった心理的属性を有している。また色にも心理的属性があり、赤は情熱、白は純潔などのたぐい。これら種々の心理的属性を備えた点・線・角・面・色もそれらが被服構成の要素となった場合、構成の仕方により均斉を保ち、対比をあらわし、変化に富み、調和を奏で、リズムを生み出すことも出来る。これら反覆・均斉・対比・変化・調和などは更に複雑な心理的刺激と

なって迫ってくる。そしてこれらは華麗・優雅・可憐・清楚・端正・奇抜・滑稽などの人間感情にもつながり、優美とか崇高美のような美の問題にも通じる可能性をひそめている。この可能性が被服を場所として表象された場合、その対象を捉えて表象の対象としての構造を明かにすることが被服美の構造を明かにすることにもなるわけであるが、この問題は次の基本的理念のところでも述べることになる。以上デザインの一般的基本問題を考えてみたが、被服デザインの問題は被服の性能や形態のところでも述べたと同様、“着ること”を場所として考えねばならないし、またつくらんとする被服に要求されている性能や形態を基底として考えねばならない。

デザインによって意図された被服を如何なる手段で如何に形造ってゆくかは被服製作の問題となるわけであるが、その製作過程には画家が絵筆を持ってキャンバスの上に自己の意図するところを表現してゆくのと一沫通じるものがある。即ちその製作過程には形作られた形と形作らんとする形との相互作用によって完成してゆく製作方式が存在し得るのである。その製作意識には表象性の意志が自由に活躍する余地が存在する。しかし現代社会では一人の製作者による表象的態度による製作方式は、大量生産に伴う工業化により機械化、分業化の製作方式にとって代られる傾向がある。この場合、分業における一部所を受持つ製作者には表象的態度は期待出来ないのが普通である。そこには科学性に裏付けられた技術が効を奏する。科学は技術の普遍化を招き、技術の個人的功拙は科学の普遍性のためかくされて、とかく表面に明瞭に現われてこない。この科学性が多数の人間を用いて大量生産する場合、デザイナーの意図を実現するに都合のよいことにもなる。また一面において被服製作における場合、デザイナーが自分の意図するところを自分自身で製作してゆくより科学性に裏付けられた機械的・分業的方法による方が効果をあげる場合すらある。即ちデザイナー自身の表象的態度が作品に全面的に反映してこないところに却ってデザイナーの意図が生かされてくる性質も内在しているようである。言い換えるとデザイナーの意図をデザイナー自身が自らの手を用いて表わすより、科学性に裏付けられた技術を借りてくる方が却って生かされる場合がある。同じ造形でも表象性という芸術の原理に貫ぬかれて製作される彫刻や絵画と被服造形との間には製作過程においても、かかる質的な相違が認められる。被服造形の技術的問題には個人製作と分業製作、handy craft と機械的製作などに関する意義や価値及び芸術性などの検討すべき多くの問題を蔵している。

## 5. 被服造形の基本的理念

前述の如く、制約性と自由性とを有する被服造形の問題も一般造形を問題とする場合と同様、美の問題をその根底にひそめている。人間は造形を意図する時、美を意識する。被服造形においては被服の機能性を無視することは出来ないから、この機能性と美しさとのかかわり合いを如何に認識把握するかが問題である。機能性を発揮しようとする態度や方法により被服美の形成は可能である。即ち機能性を高度に発揮しようとして表象性<sup>8)</sup>（視覚性・触覚性・聴覚性・嗅覚性を包含している）の意志のはたらく時、被服美の形成は可能となる。そして被服美の形成は“着ること”を場所としてはじめて成立する。“着ること”を考える場合、先ず問題となるのは人体と被服とのかかわり

合いに関することであろう。そこでその基本となる人間の体についてみると、人体の全体的な大きさは身長・体重・体表面積などで示され、身体各部の寸法についても医学・体育学・人類学などの分野で計測されているところである。人体は形態的に大別して頭部・軀幹部・2本の上肢と2本の下肢との四つの部位からなり、横断面は隋円形をした円筒形を基調として、これに四肢の分岐が多少の複雑さをあたえている。この四つの部位の位置的關係や、その結合状態及び構造、身体各部の比率などは被服の形や着装を決定してゆく条件となる。また人間の体格は骨格や筋肉や脂肪層などの質的量的關連のあり方によって夫々特徴づけられている。個人の体格のちがひも肉體としての人間が被服の姿を形成する要素ともなる。人間の體質も被服の姿に關連してくる。勿論顔面を含めた頭部が被服の容姿の部分的・作用的役割を担ってくることは重要な問題がひそんでいる。被服の形態的容姿を捉えようとする時、無視することの出来ない点は人間の肉體の動きである。肉體の動きは多かれ少なかれ精神的支配を受けている。従って被服を通してこの精神的動きも伝わるわけで、人体の動きは裸体においては直接的に表現されるが、被服を通して間接的に表現される場合、被服自体のもつ素材の内容（被服材料・心理的屬性を備えた被服の形態・両者の關連のあり方）の相違により、その動きは多様な表情に変わり得る可能性を有している。その表情は見るものの美意識を喚起する場合がある。舞踊芸術においてはそれが極度に要求され、主題とさえなっている。以上の如く、被服美は人体と被服とのかかわり合いの仕方において形成され、“着ること”を場所として成立する可能性を有している。よって被服美形成のための造形技術の基本的理念は人体と被服とのかかわり合いの仕方において把握すべきであり、人間が被服を“着ること”を場所として考えるべきである。そして“着ること”には単に人体と被服との關係のみならず、自然的・社会的・心理的諸条件がからんでいることも無視出来ない。そこに、“着ること”を場所として美的體驗の実現の可能性がうかがえるのである。寒さにふるえたり、汗びっしょりの被服からは被服美は期待出来ないし着心地の悪い被服からは美的なる着こなしは望めない。つまり被服に要求される性能や形態も自然的生理的・社会的心理的・技術的諸条件とからみあって、調和ある統一を保ちつつ人間によって快適に着こなされる時、美的なる人間存在を形成する要素となる。被服デザインも製作もこの辺の事情を基底として行れるべきであろう。

以上、被服美の形成の過程の考察を通して被服美の構造の問題にも言及したつもりである。即ち被服美の構造は被服を“着ること”を場所として成立し、被服着装における表象的意志の実現の可能性を目的として、被服デザイン・被服製作・被服着装において表象的意志を発揮せしめることの中に支えられている。そして被服造形技術の基本的理念は被服美形成のための過程やその構造を認識把握することの中に窺われるべきである。（未完）

擧筆に当り御助言を賜った京大教授井島博士に謝意を表す。

## 文 献

- (1) J.C. Flugel: "The Psychology of Clothes, The International Psycho-Analytical Library No. 18", The Hogarth Press and The Institute of Psycho-Analysis, P.16, (1950)
- (2) 同 上, P.17, (1950)

- (3). カーライル著, 石田憲次訳: "衣服哲学", 岩波書店, P.9, (昭和21年)
- (4). エリック・ギル著, 増野正衛訳: "衣裳論", 創元社, P.186, (昭和27年)
- (5). (1)と同じ, P. 91~102, (1950)
- (6). Kimball Young: "Social Psychology", Appleton-century-crafts, inc. New York, 2nd ed., P.416 (1944)
- (7). (1)と同じ, P. 155-166, (1950)
- (8). 井島勉: 美学, 創文社, P. 76~94, (昭和33年)

### Summary

In the first chapter, I inquired into the formation and meaning of clothing, on the premise that clothes are worn by human beings.

In the second chapter, I considered the subjects for the design and construction of clothing. The subjects are stipulated by several conditions—the natural, the physiological, the social, the psychological and the technical—, and restricted by the historical and social circumstances, but afford ample room for freedom and aesthetic elements. Consequently, we must consider the design and construction of clothing under such stipulation, restriction and aesthetic desire, and grasp them in the field of "wearing of clothes", because their purpose lies in the "wearing of clothes". It is the problem between the human body and clothes in relation to the natural, the social and the psychological conditions, and the aesthetic phase of clothing is also to be pursued in the field of "wearing of clothes".